
挿啓、日だまりの人々

あおぞらスカツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拝啓、日だまりの人々

【NZコード】

N4773A

【作者名】

あおぞらスカツツ

【あらすじ】

ある日、小さなアパートに住む「私」が隣に住みながらなんでも屋を嘗む男のドアを開くと、そこには一人の女がいた。そこから一度と来ない静かな一日が始まる・・・

プロローグ

手先を雨戸にかけると、手先の感覚が冷えた空氣に染み込んでいくようにして失くなつた。

やはり厚い板の先にはほの暗い街が広がつていた。まだ埃、もたつていない、風が吹き込んでこなければ人はまだ屋外に出ようとしない。きっと隣部屋に住んでいる男はそうなんだろう?全く、朝から何やつているの、まだ今は四時ちょっと過ぎよ、そりや壁に耳を当てれば毎回何かしらおかしな音は聞こえるけれど。まあもう少ししたら隣部屋のベルを鳴らしましよう。もつとも、小綺麗な物じやなくて、固い紐を左右に触れば上に吊されたバケツが音を出す、小汚いベルなんだけれど。

隣部屋に住んでいる男と私は妙な関係で結ばれている、そう言つたのは男の兄であつた。この兄といふのがまた妙な男であつて、今は作家をしながら、時々地方の新聞紙に小さなコラムを書いている。私は一度だけそのコラムを見させてもらつたのだが、これがまたおかしい。覚えている限りでは、あの番組がわかるようになれば君はもう一人前の大人だとか、君はある伝説の技を覚えているかとか、やはり作家なだけあつて一般人にはわかりにくい内容であった。そんなことを覚えていた間に窓辺に漂う空気は変わつていた。さつきまでとは違う、人肌になじんでいく。はあ、少し首を動かせば、ほら、人も鳩もいる。それじゃあ私も、バケツを鳴らしに行きましょ。

一人の女

慣れた足付きでサンダルを履く。

いつもこんな調子だ。

彼の部屋にはよく自分の跡を付けている。

別に私と彼との間に深い関係はない。

勝手に上がり込んで、そこら辺に置かれている新聞を開きながら持参したそら豆をつまむ。

友達？ 違う、そんなんじゃない。

もつと馬鹿らしいもの。

もう一つの薄汚れたドアの前に立つ。

この貧相な景色の中で足りないものがある。もし、恋人同士になりたいのであれば、友人同士になりたいのであれば、私はバケツを鳴らした。ぶつきらぼうな声が耳をかすめる。必要ないだろう？ ああ、本当にその通りなんだ。つまらないほど、欲しがらない。

だが、いくら待っても返事はなかつた。

私はいつものようにドアノブを握った。

男の横には一人の女性がいた。歳は二、三歳上ぐらいで、余り変わりはない。栗色の髪は胸の辺りまであり、顔の中央に伸びるすらつとした鼻、上品な二重、睫毛が動く度、その下には髪と同じ色の瞳が潤む。

だって、ほら、私もある男も大学生なんだから、もういい歳じゃない、こんな人がいたっていいのよ。朝、自分が何の音で起きたと思う？ 物が壁に当たるけたたましい音。時々聞こえる、誰かを怒るような、男の怒号。まあ、その相手がまさか女なんて思いもしなかつたけど。

しかし、私は知らずのうちにおかしな身構えをしていた。私以外でこの部屋に上がった女は今、目に見える、栗色の髪の彼女だけなんだ。そういえば、

「こめかみにくすぐつたい、しかし熱い体温を持つ記憶がほどばしる。そういうえば男には地元に置いてきた彼女がいたはずだ。あの彼女も彼女で、部屋で寝転がる私に対して言つた最初の言葉が「話は聞いています。これからもこの人をよろしくお願ひします」

そうしてそのまま、男にお弁当がはいったスーパーの袋を渡すとさっさと帰つていった。少し幼さが残る顔だつたが、人形のような大きな黒い瞳は今でも印象に残つている。さっぱりとした声から分かるように、彼女は私に対して嫉妬心をもたなかつた。男とも何も話さずにつていった。それで関係が果たして続くのだろうか。

いや、続くのかも知れない。

今、何年生？もう、三年生。

少なくともそれだけの間付き合つているんだ。

二人は堅い何かで包まれているようで、私のような人物の声さえも無視をする。そんな出来事をずっと記憶していたのに。だつて、あんな重いものをどうするの？

いや、なんでもいいの。彼がどうなるうが。

男と私の間にはそんな互いを心配するような関係なんてない。妙な関係、同じ大学なだけ、古いアパートの住人隣同士、遅刻しそうなとき車に乗せてつてくれる、そう、そんな馬鹿らしい関係。

「この人、は？」

「今日の相方。大丈夫、食べたりしないから」

この男、私は怒鳴つてやろうとした、だが、私はこの男の名前を知らないんだ。

私の思い

あの場面、古ぼけたドア、ベル代わりのバケツ。
足らないもの、正解は標札。

彼は私が引っ越してくる頃にはすでにここにいた。

ちょうど三年前、この時期。

日数を追うごとに日差しが明るくなり、まだ昨日のことのようにと手のかじかんだ感覚を思い出しながら、部屋の中で一匹の虫を見つけた。その虫はろうそくの火のように安定しない体をふらふらさせ、私の持ってきた灰色のバックの上をひたすら回っていた。

天井はうつすらと茶渋の色のしみの影があつて、白い壁紙には画鋲の跡が三、四個残っていた。

部屋には私、バック、虫しかないけれど、もう少し、あと少ししたら、ここは大量の段ボール箱で埋め尽くされる。そうしたら、私は息苦しい気持ちを押さえ込みながら、パズルのピースを探していくように荷物の中に手を入れていく。

ああ。

何が好きでこんなことをしなきゃいけない?
壁にもたれ掛かりながら考える。

そりや大学行く為だけど。

いつの間にやら虫はどこか飛んで行ってしまった、だつたら私も、
と思って手のひらを大きく床についたら、床は思ったよりも滑って、
鈍い音と共に視界がおかしく変わってしまった。

頬を冷たい床につけて、誰にも見られていないのに顔を指先で覆う。
恥ずかしい、そんなわけではない、やっぱり、恥ずかしい。

いや、多分今の状態を見ているのは虫だけだよ、なんて言葉で自分を励ます。

指の隙間からさびれた空間を覗く。

つまらない日常が大好き。だつて何も変化しないんだもの。
友達も、両親も、同じことを繰り返していれば、それで、いい。
誕生日も来なくていい。誕生日ケーキを汚くしてしまつるつそくも
いらない。

今日と全く同じことが明日来ればいい。
ニュースも今日と同じ事を繰り返していればいい。
なんで進もうとするの？私はこのまでいい。
そんなに急いで、霧の奥へいり込んで行って、昨日の思い出を美化
するのはとても楽しい？
何も変化しなくていい。つまらなくて、充分。

人差し指をそつと動かした。見える物が黒く沈んでいった。

そうだ。

大事な事を思い出した。

礼儀、隣の住人に挨拶をする。

灰色のバッグの中には綺麗に包まれたお菓子が一箱だけ入っていた。

こここのアパートは二階建ての合計四部屋だったが、天井から足音が聞こえることはなかつた。

大家さんは、この四部屋の中でたつた一人、住んでいる若者がいる
がいいかね、と言つた。

もちろん、いや、むしろ、いないほうが嫌。
そうか、それならいいが。

大家さんは付け加えた。

なぜこのアパートに一人しかいないのか分かるかい？

知りません。

大家さんは困ったように、あまり言いたくないんだが、五月蠅いから、なんだよ。

「ああ。」

ため息の代わりに情けない声が出てしまった。

その五月蠅い人に、お菓子を渡さなければいけないのか。

話を聞いたとき、辞めようかと思っていたけれど、私はこここの家賃に相当ほれ込んでいたし、

それに、ほら、私は何時間かここにいるが、壁の奥からは何も聞こえてこない。

なんだ、きっと隣の人も大家さんに言われて丸くなつたのね。

私はのつそり起き上がつた。

だつたら大量のダンボール箱が来る前にせつと渡してしまいましょう。

灰色のバッグへと手を伸ばした。

変化しなくていいのに、どうしてそんなに私を前へと押すの？

淡い橙色に包まれた一つの箱を手に持つ。

これから、嫌なことがたくさんあるかもしれないのに、それでも面白がるつもり？

こうやって、思い入れのない場所へ来てしまつた。

目標。現状、維持。

私は銀色のドアノブを触つた。ぼやけた冷たさがゆっくりと皮膚に染み込んでいった。

男の正体

私は古ぼけたドアを叩いていた。

「すみません、いますか？」

返事がない。

「すみません、・・・すみません！」

このドアの横にはベルが無かつた。

本来ならあるはずなのに、私のところにはちゃんと設置されていたはずなのに。

「つたく、いないのかよ・・・」

人差し指に痛みを覚えながら、私はドアから一步下がった。

背後で大きな風のうなり声が聞こえた。

首を少し動かし、一面に広がる建物たちの間に大きな隙間があるのを見つけてそこに田をやつた。

日は少しづつ落ち始めてきていた。

前よりも少し時間が違う、私はそのことを思つと悲しくなつた。

身に覚えのある風が髪の間を結つていくのを感じ取れば、近くにあるのであらう、木々がぶつそうな乾いた音を立てた。カラスの鳴き声を聞きながら、それは不定期に続く。

いないのでしたら、また後でくればいい。

そんな考えがよぎる。

そうだ、私はこのアパート近辺の様子を思い出した。

どうせ外へ出てきたことだし、近くにコンビニはないだらうか。

ダンボール箱に包囲されてしまったのであれば、とてもじやないが晩飯を作ることは出来ない。そうしよう、面倒だし、買ってきて簡単に済ませよう。

私が夕焼けの空に浮かぶカラスの姿を確認したとき、背後で鍵の空く音がした。

最後にノックをした時から随分と時間が経っていた。

「あ」

私はその方向へと体勢を変えた。

ドアに体半分を隠してそこに住む住人が顔を見せていた。

「ごめんなさい、・・・何か？」

寝起きの低い声が私を驚かせた。

男だった。随分と綺麗なツヤを持つた黒髪を持っていた。切れ味のある二重の下には黒ずんだクマがあつた。

よれよれの黄色のティーシャツを着て、中心には可愛らしい兎の顔がプリントされていた。

男は私の顔を見ると眉をひそめた。私は慌てて、

「すみません、今日から隣に住む者です、名前は、」

私の名前を続けさせようとした。しかし男は面倒臭そうに、

「いいよ、言わなくて。どうせ言つたって何にもならないだろ」

予想外の返答に焦る。

「そ、そうですか？・・・せめて名前ぐらいは」

「あーあ、いい、いい。知らなくたって別にどうつてことないし」

「そうは言つたって・・・」

「代わりに俺も言わない。それでいいでしょ」

こんなこと言う人、初めて聞いた。

間違いなく私はこの男に戸惑っていた。

いや、誰でも戸惑うであろう、なぜならこんな先制パンチ、まずやられたことがない。

私はそつと目を横にずらした。

男はわかりきつているよつに、

「表札なんてないぞ」

と言つた。

心の中は筒抜けだった。

「え、あ、それじゃあ」

これお菓子です、食べてください、美味しいですよ。

私は男に箱を差し出した。男は片手でそれを受け取る。

「それじゃあ、私帰ります、それじゃあ」

男が声を張り上げた。

「あ、ちょっと待て」

もうかかわりたくなかった。こんな攻撃を食らってしまっては、どうすることも出来ない。

ありえない、もうちょっと常識はないの？そりや知つたつて仕方ないけれど。

「なんですか」

私は男の顔を睨みつけた。

「怖い顔なんてしなくていいから。あのさあ、ちょっと手伝ってくれない？」

「はあ？」

「いやいや、今内職してるんだけど、どうも明日までに間に合わない。3日ぶつ通しでやつてたら、いつの間にか寝てて。このままじゃやばいんだ。ね、だから」

「他の人に手伝えさせればいいじゃないですか」

「そんなこと言つたつて、このアパートには俺とお前しか住んでないんだよ。わざわざ友達の家まで行くのも面倒だし。まあそりや初めて会つた男にこんなこと言われるのは抵抗があるだろ？。そうだ、半分渡すからお前の部屋でやつてもいい。それでどうだ」

「無理です。これから引越しの荷物がたくさん届くんですから」

「無理じゃない。あのさあ、人間サンは未知なる能力を持つてるんだよ。どうにかなる」

「話が少しずれていいのうです」

「よし！それじゃあここは兄貴の権力を使おう。ウチの三兄弟のうちの一人は小説家なんだが、それが結構メディアに露出してんのよ。だから顔の幅が多い。お前の好きな芸能人つて誰だ？会わせてやろう、どうだ」

「いや・・・」

「好きな芸能人いないの？ まあなー大学生？ そう、大学生か。 うーん、 その歳になるとなー、 何が好きなんだ？ イケメン俳優？ イケメンお笑い芸人？」

「違います。」

「じゃあいるんだ。 お兄さんに教えてみよう」

「これを言つたら私生きていけなくなります」

「そんな酷いもんなの？ 僕ね、 結構テレビ好きだからマイナーなところまで知ってるぞ。 ・・・ お前さ、 僕をそんな喋らせて楽しいか？ 面倒くさそうな表情してるし、 もう手伝っちゃえよ。 今ならどんぐりガム付きだぞ」

「断れない。 断つたら、 またこの話が続くんだ」

「ちょっとだけなら、 いいですけれど・・・」

「おうし、 きた。 ジャあ家に上がつてよ」

「持つてきてくれないんですか？」

「ちょっとと一少しは俺をいたわりなよ。 セツキモ言つただろ？ 3日ぶつ通しだって。 どんぐりガムつけるんだからそれぐらいのサービスお返しは・・・。 そんじゃバイト料もつけたしといてあげるよ。 結構な額になりそудだし。」

「もう何でもいいです。 セツキと私を上がらせてください」

「何だよ、 怖いなあ。 ・・・ 素直になりなさいよー」

男はドアを全開に開いて、 私を部屋の中へ案内した。 私はその中へと入つていった。

その光景に、 私は愕然とした。

部屋にはプリント、 複数の字で書かれたノートが無数に転がつていた。 床の色も見えない。

その中央にみかん箱があつた。 上には綺麗な文字で書かれたレポート用紙がつっていた。

「俺さあ、 なんでも屋をやつてんだよ。 そしたら見事に依頼が殺到。 今は留年寸前の大学生から、 たまりに溜まつたレポートを完成させ

てくれつていうのと、近所の高校生からの依頼でノート[写し]、それに春休みの宿題になつたプリントをやつてくれつて。君にはプリントとノート[写し]をやつていただきたい。有名な進学校だから半端ない量だし、俺にも解けない。レポートは中身は薄いから大丈夫。兄貴の力もかりればどうにかなるはずだったんだけれど、量をなめすぎていた。あいつは完璧留年だね。しかもあきらかにレポートじゃないような奴が入つてているんだ。じゃあ今からダンボールにつめてあげるから、」

「なんでも屋つて？」

「おい、俺が説明しているのを無視してその質問かい。・・・まあ要するにお金が欲しかつたわけだよ。だけどさ、あんまりやりたいバイトも無いし、それにいちいち上の人に言葉を聞くのも面倒臭い。だからだ、俺は自分でこの仕事を始めたのさ。少々値は高いが、とりあえずはなんでもやる。そしたらもう引っ張りだこ。忙しいけどお金はがつぽり。でもよく考えたら忙しいからお金使えないんだよなー。もともと貧乏症だから通帳の残金見るのも恐ろしくて今は寄付にまわつてる。だったらもうやめればいいじゃんつて言つても、一つの趣味みたいになつてるしなー。」

「へえ・・・・・」

「反応薄いな、もうちょっと何か言つてよ。まあ時間も無いしな、期限は明日の朝七時までだ。依頼者の高校生は明日が学校始まりなんだつて。どうにかして渡さないと。」

「どれだけの量ですか？」

「うーんと、数学のプリント三十枚と美術の絵描きと音楽のベートベンを聞いた上での感想、国語は読書感想文、それはなんとうちの兄貴が書いた小説を読んで感想を書くんだつて。だから兄貴に直接聞いて書いたら。あとは理科、社会のワーク。社会は日本史だけ進めておいた。だつて俺日本史大好きだから。理科は化学式がよく分からんから手つけてない。・・・・どうにかなるでしょ？」

「いや、ならない！今はもう日が落ち始めているんですから！」

「大丈夫！元気があればなんでも出来る。力道山のあの勇姿を思い出せ。」

「いや、それは力道山じゃなくて、」

「お前、俺を誰だと思っている？ 大のプロレス好きなんだぞ？ まあお笑い限定だが・・・いけねえ、こんな場合じゃなかつた。俺はいつも喋りすぎるんだ、じゃあよろしく頼むよ」

男はダンボール一箱を渡した。その重さに拍子抜けになつた。

「じゃあ六時半になつたら迎えに行く。そしたら依頼者の家まで行くぞ」

随分と無茶苦茶な男だつた。だが実際の中身はもつと少なく、美術の絵描きと理科と社会の薄つペらいワーク、それにもう終わつていった読書感想文だけであつた。荷物はまだ届いていなかつた。

私はさつさとそれを終わらせると、ひたすら段ボール箱を待ち続けた。しかし、あちらの手違いなのか、それは今日中に届くことは無かつた。男の言つとおりの内容でもよかつたかもしれない、私はいらない手直しを美術の作品に施しながら、余つた時間を過ごした。男は翌日、約束の時間にベルを鳴らした。私は男の運転するオレンジの軽自動車に乗つて、依頼者の元へと向かつた。男は途中で車をわき道に止めた。

「ばれるとやばいからね、親御さんに」

男は荷物を持つて走つていた。私は車内に一人取り残された。しばらくすると、男がゆっくりと歩いて帰つてきた。手には茶封筒がしつかりと握られていた。

「ポストに入れておいた。それで帰るうと道を一本曲がつたら、依頼者がやってきてね。ありがとうございます、これを、って言つて」

男は運転席に乗り込むと、私にその封筒を渡してくれた。

「本当は駄目なんだけれどね、こんなこと。引き受けた後氣付いた。それはちゃんとあの高校生にも言つといつたよ。そしたら分かつてくれたらしくて、これからは自分で頑張りますつて。大学の奴らにも

言わなきゃなあ

男は空笑いをしたあと、

「それ全部やるよ」

私は封筒の中身をそつと見た。

そこには一千円札が入っていた。

「高校生だからそれぐらいしかないんじょ。でも珍しいよ、今時。

家宝だな、そりゃ

一千円札一枚で、私は田を丸くした。

「あと、これから君は俺のパートナーとなり、なんでも屋を手伝つてもらいます」

「はあ？」

「いいじゃないか、まだ沢山残つてんだよ。お爺さんの庭掃除、小学校の便所掃除、それに出張でママさんバレーのお相手もある。報酬は人それぞれ。感謝の心であつたりとか、チロルチョコであつたりとか。それに、お前なら都合がいい。もしも人を殺して片方が捕まつても、必ず相手の名前は言えない」

心臓を金槌で叩かれたような衝撃が走つた。

男は私の表情を見ると笑つて、

「嘘、嘘。そんなことは絶対しない

手を横に振る。

いつか私は男を狐として見ることがあるのだろうか、そんなことがあつてはならない、こんな男に人生を振り回されるなんて。

だけど、暇つぶしくらいにはなるのだろうか。

私は妙な変化に胸をどきどきさせ、興味を示していた。

ある思い出

私の一日は電話の着信音で起きたことから始まる。

相手はいつも隣に住む男であった。

「やあ、おはようございます。早速だけれど、俺は今から献血に行かなければいけない」

「そんな依頼が入ったの？」

「いや、CMでやっていたから。時にはボランティアも大切なのさ。そんなわけで、今日もよろしく」

私は大学に行く仕度をすると、男の部屋を訪ねた。吊るされた硬い紐を動かせば、バケツが音を出す。男はすでに出てしまったようだ。私は男から貰った鍵を取り出ると、鍵穴に差込み、そのまま手首を右に回した。

中は日によつて表情を変えていて、ある日は大量の服が置かれていたり（それは女性の方からの、溜まった服にアイロンをかけて欲しいという依頼だった）、ある日は可愛らしいお弁当が作られていたり（緊急で早く仕事場に行かなければいけないという母親からの依頼で、子供の三人分のお弁当を作つておいて欲しいというもの）していた。

私は講義の時間まで設置されている黒電話の前に座つた。電話が来るまでは、みかん箱の上で別の依頼物をしていた。

この依頼は小学校の先生からで、テストの点数を付けておいて欲しい、というものであった。私は赤ペンを握りながらテスト用紙をめくつしていく。多分このテストは一年生がやつたものであろう、まだ上手く書けない字を一生懸命に紙の上に広げている。今の私には考えられないような間違いをしている、そう思つと、ああ私は歳を取つたな、なんて考えてしまつ。

黒電話の音が部屋に鳴り響く。

私は空いているもつ一つの手を使って、受話器を取り上げた。

最初の決まり文句はもちろん、「

「はいこちらなんでも屋でござります」。

「あの、急な事なんですが、依頼出来ますかね?」

私は赤ペンを置き、バッグの中から携帯電話を取る。

時刻は九時半。相手に言っていることが伝わるよう、はきはきと。男に教えてもらったことを実践する。

「はい、今日は一時までなら依頼を受け付けてあります」

「あのー、十時から始まるスーパーの特売で卵を買っておいて貰いたいんですけど···」

どんな依頼でも受け付ける。なぜならなんでも屋だから。

「はい、分かりました。個数と、それに住所も教えていただけますかね?」

「えっと、三個と、あと住所は」

私は黒電話の横に置かれていたメモ用紙に住所を記録する。電話を切ると、私は早速ここに部屋を出た。ちゃんと、二つの鍵を持つて。

近くにとめてあつた男の自転車に乗ると、私はスーパーへ向けて一気にペダルを踏み始める。

最初は大きな仕事も来るのかな、なんて外国の映画を思い浮かべながらそんなことを考えていたけれど、実際は雑用にも近いことばかり。

小さな小川を横目に私は自転車を走らせる。

この仕事を始めて一ヶ月。一番大変だったことといえば家出した小学生の女の子を探すこと。

[写真に写ったその小学生は背伸びをしていて、茶色の髪に短いスカートをはいていた。依頼者の両親から一枚のノートの切れはしを渡された。そこには紫のペンで、

「毎日が楽しくない。きいはこの家を出ます。」

きい、とはこの小学生の名前だった。

きいちゃんは母親の財布から通帳を持ち出し、両親の今まで貯めていたお金をすべて取り出していた。

「なかなかやりますね」

男はそんなことを言いながら驚いていた。私はほんやりとした気を持ちながらその子の母親と一緒にひたすら探した。男は父親と一緒に行動をしていた。

やがて私の携帯に一通の着信が入った。男がここから一つ先の駅にて女の子を発見したということだつた。彼女はたつた一人でいて、お金は千円ちょっととしか使われていなかつた。

私は母親に言つた。

「この歳の子供は皆、そんな野心を持つています」

それでも母親は、きいちゃんと再会すると駅の真ん中にもかかわらず怒鳴り散らした。父親は黙つてその様子を冷酷な目で見続けていた。

「あんなことをすると、そのうち子供引きこもりになっちゃうぞ」「私の耳でそつと囁いたのは男であつた。

今日一日を潰しこともあつてか、報酬は二万円。

私は男と一緒に、そのお金を使って深夜のレストランで静かな食事を取つた。

残りは分け合い、私は途中でコンビニに寄つてもらい、ポテトチップスを一袋買つた。

スーパーの中は、人々の波がひたすら特売品に向かつて打ち付けていた。

肩を右、左と上手く使いながら私は卵売り場へ直行する。卵は残り五個で、なんとか、といった形で私はそれを買うことが出来た。メモしておいた住所はここから近い。卵を割らないようこと慎重に自転車を進める。

「昼頃に帰つてきますので玄関の前に置いといてください。お金はポストの中に入れておきます。」

着いた所はマンションであった。軽く十階はあるだろう。私は依頼者の部屋へ行くために、階段を上がつていった。

依頼者の玄関の前に買つてきた卵を置くと、すぐ傍には可愛らしいお年玉の袋があつた。ポストの中だと聞いたはずなのに、私はそれを手に取ると中身を確認した。

中には卵代と報酬の千円が入つていた。千円は四つに折られていたが、かなり急いでいたようで、夏目漱石の顔が歪んでいた。

さあ、私は今来た道を戻ろうとした。

こうしている今も誰かから依頼が来ているかもしれない。それに、テストの残りもある。

私は家出をしてしまつたきこちゃんのこと思い出した。

つまりなくてここに、「どうして変化をしようとしてしまつの？」

自ら見えない沼へ飛び込むなんて、とても出来ない。

それは、私が大人になつてしまつたからなのだろうか。
安全で、それでいいのに。

猫と男と

少しくほんでいるドアノブを握る。軽い。

一枚板を挟んで、奥から物音が聞こえる。

「早いね」

私は奴が部屋の中にあるものだと思つて声をかけた。だが返事はない。

でもあいつのことだから、しょうも無い根拠で私は続けた。

「あのわあ、なんでも屋つていう素直な名前はいいけど、せめてもうちよつとひねつてくれないかなあ。今時ありえないじゃん。例えようはず屋本舗とか、意味分からぬけど、でもなんでも屋は嫌だよ、今日初めて気付いた。それでも気付くまでに期間があつたつてこつことはやっぱり自分おかしいのかな、でもあんたもおかしいよね、いやいや、RPGのしきだらつてつこんでみよづ。よろず屋つて今時そんなものにしか出てこないネーミングだよ、ねえ、聞いてんの？いや、私にはわかっているわ、お前がどんなもののか、必殺フライパン返しだ、きっと心の中では毎日三途の川をどうやって渡ろうか考えているでしょ。私は騙せないぞ、だつ」

「お前恥ずかしいな」

聞こえないはずの声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、そこには、奴。右手にはスーパーの袋を提げている。足元が裸足にサンダル、というものだったから、奴は一旦家へ帰ってきたのだ。そして鍵をかけずに出かけた。私はドアノブの感触、部屋から聞こえた物音から、奴が家にいるものだと思つていた。あれ、物音は？だけど、そんな疑問もぶつける余裕はなかつた。私は鼻の奥がつん、となるのを感じながら、じどうもどりに、

「いや、全然恥ずかしくないですが。・・・・献血楽しかった？」

「いや、軽く貧血氣味」

そう言つと奴は私を押しのけてドアを開けた。ここに、ほうれん草

ぐらい食つていなかよ、そんな言葉が脳裏をかすめた瞬間、私はいつもの（冷静沈着で頭のキレる）自分に戻つてゐることに気が付いた。

咄嗟に出た一言。

「泥棒入つてゐんぢやないの？」

やはり理想なんてこんなものだ。

目の前にいるたつた一人の聞き手も無視をする。

やつちやつた、例えどんなに重要な場面であつても力んではいけないな。

そうやつて自分自身に対しても説教を試みようとしたとき、足元に柔らかな感触があるのに気が付いた。それはゆつくりと私の足を撫でる。

えめらるびぐりーんの瞳を持つた、白い猫であった。

しつかりと整えられた毛並みといい、この人懐っこい。いいところのお嬢さん、かは分からないうが、きっとそんな感じなんだろう。

「ミレース、君は可哀想だね。相手は女の色気もない奴と野郎だ。ご飯はキャットフードだよ、間違つても煮干、なんてものは買つてこないからな」

私が話しかけていたのは、この猫、ミレースだった。

この子は奴が拾つてきたものだった。私はその姿に騙されていたのだ、嗚呼。

「そんなわけで、ミレースは会計役だ。君、そろばん一級を持つてるかい？」

「悪ふざけはやめましょ。それ」「ミレース？馬鹿みたい、なんだその名前」

「おいおい、ミレースを罵倒しないでくれ。俺はこいつ見て猫好きなのさ。ちなみに今から戦争やるから三人の中で一人誰か頂戴って言われたら、真っ先に俺が行く。ミレースを行かせるわけには行か

ない」

部屋でこんな会話を続けていたら、いつの間にかお昼を過ぎていた。私はまだノルマを完全に終わらせていなかつたし、今日はなかなか次の依頼が来ない。

「最初の何日間、なんだかすゞしく忙しかった、そう感じるのは俺にも分かる。でも皆新しい物好きで、だけどすぐ飽きる。何年単位で、その繰り返しあ。今俺たちは飽きる、という部分に来ているのだ。男の腕の中でリラックスするメントスが、それに同調するかのように高い声で鳴いた。

「じゃあ今しかない、なんでも屋っていう名前をどうにかしようよ」「それには賛成できない。どうでもいいじゃないか、大切なのは心に中身。それにしても、本当に暇だな」

この男。暇だな、って、それはないだろ。今日だつて授業があつたはずなのに、ここには可愛らしい猫と隣部屋に住む（色気のない）女と戯れている。

「あんたさあ、」

「何？」

本当にいい加減なんだね。これは私の、あんたを見ていての感想。だらだら生きるの楽しい？親とか、お兄さんとかに怒られないの？なんか小説とかで影響受けなかつたの？いや、私は否定しないよ。その逆も。

「うーん。まあいい加減、だしねえ。別に怒られはしなかつたけど。ただね、」

そのあとに続く言葉はぼやけ、私の頭を搔きぶつた。

夕方、何事も無かつたかのように私は部屋を出た。今日のノルマが達成したためだ。奴はミレストスにべつたりで、つい先ほど、散歩に出かけてしまった。

自分の部屋の中に入る。隣の部屋と同じ作りなのに、中に入るもの

でだいぶ表情が違つてくる。ここ何日間で、部屋は一気に荷物に埋め尽くされた。頬にまとわり付くような重い空気を取り払おうと、私は窓を開けた。冷たい風が入つてくる。

きつと、重い空気を取り払いいたいんじやないんだ。髪の毛が風に踊らされて、くすぐったい。

妙に響くあの言葉、どうにもならないのにどうにかしようとしているんだ。

変に、おかしく、離れない。気持ちが悪い。

「皆力入れて生きてるから、皆同じものしか見えない。俺は皆が見えないものを見るんだ。

分かるだろ？力みすぎなんだよ。流されて、時々おぼれそうになりながら、川底で空を仰いだとしている蟹を見つけてやるんだ」「どこからか、動物のような鳴き声がした。

夢の中

足元には一匹の猫、ミレトスがいた。

私ははつとした。田の前には男と女、さつきの場面がただ広がるばかりである。

いけない、いけない、すっかり昔の思い出に浸つてしまつた。

「普通だつたらくその男の言葉を理解した色氣の無い女はなんでも屋を辞め、新しい道へと旅立つていつたゝで終わるはずだったのに」私は頭が悪い。奴の言葉は形にもならずに今までずるずると引っ張つてきちゃつたし、なんだか妙な雰囲気が漂うこの一コマ。

私はもう一度起こつている状況を整理すると、

「一体何をしていたわけ? あんたには大体彼女がいるでしょ

悪い人なりの精一杯の言葉を発した。

本当に怒りたいときに名前も言えないなんて。

なんだかずつといいように振り回されて、お金だつて貰つてゐし、それなのに一番大事な名前を知らないつて、どうこうことよ。

「いやいや、俺は喧嘩、説得、それ以外何もしてない。俺は彼女を一番大切にしますから。」

男はへらへらと笑うが、それで女の存在が消え去るわけでもない。

「じゃあその人は何なのよ!!」

と言つてはみたものの、よく考えればこの台詞、なんかおかしくないか?

そりや変なことばつかり考え方ちやつた私が悪いのだけれど、こいつのことはどうでもいいのだけれど、ハつ当たり気味になつちやつたのはいいのだけれど、これじやまるで彼女みたいじやないか。いやいや、そんな気はあるで無いのだけれど。

「おいおいそんな声出しちゃミレトスがびつくりするわ。俺はミレトスが一番大事なのだ。」

それにミレトスは反応した。尻尾を振りながら、ミレトスは男の元

へ駆けて行つたのだ。男はリースの脇の下に手をやると、大事そ
うに抱えた。

「リエに来るのは依頼者以外の何者でもありません。」

男は一度、栗色の髪の毛をもつた女性のほうを振り返つた。女性は
静かに頷く。

「朝っぱらから言つにくる話なんだけどな、」

男はリースとじゅれ合しながら話し出した。

この女性、リエさんつていうんだけどね。つい先月、夫さんと離婚
したんですよ。それで色々疲れちゃって、この俺のところまで来て、
「殺してください」だって。そりやなんでも屋だけども、俺たちが
やるのは一般的に言う雑用、なんだよ。まあ見ず知らずの男に向か
つてそんなことを言つてはよっぽどだつたと思つし、そりや
今まで分かつていたことも分からなくなるよな。そんなわけでだ、
俺は彼女を実に鬱陶しい、青い言葉で説得した。そしたらリエさん
逆ギレ。流石の俺もびっくりしたよ、だってこんなにべっぴんさん
なのに、あんなキレかた！いやあ本当に世の中は難しいねえ。んで、
このまだとアパートが崩壊するつて思つたし、めんどうさかつた
し、じゃあ出来るだけのお手伝いはしますよーつてところでお前が
来たのだ。

「リエさん本当に疲れちゃつてるので早いうちに決着つけます。出
発は夜の十一時。車は俺の兄貴が用意してくれるから。いや、兄貴
に上手く嘘つけてよかつたよ。こんなことやつてるつて知つたら大
変なことになつちやう。君も行くんだよ。リエさんの最後の姿見届
けようぜ。あとリースも。」

男は一通り言い終わると、リエさんに向かつて、「これでいいでし
ょ？」と微笑んだ。

「大丈夫！今はまだ朝です。あ、やりたいことは今のうちにやつとこ
てね。もしかしたら一緒に死ぬことになるかも知れないから。まあ
それはリエさん次第だけれど。・・・きっとこの世に存在する娛樂
以上の娛樂があるに違ひない、ミレオス、」

奴は自分の腕の中で田をつぶる猫に向かつてそう言った。
えめらるどぐりーんの田を持つた猫、ミレオスの心は奴にも分から
ない。

だけどミレオスは、確かに柔らかい声で鳴いた。

「あの、よろしくお願ひします」

リエさんがそれに続くよつに言った。

纖細で、手荒く扱つたらつぶれてしまいそうな声だった。

私、頭が悪いんじゃなくて、ただおかしくなつちゃつただけかもし
れない。

嫌だ、嫌だとたつた一本のタコ糸を握りながら泣いている自分が奥
底には確かに存在しているのに、それを言葉で表すことが出来ない。
「車は昼頃、来るんだ。俺とリエさんは買出しにいってくるから、
お前、兄貴を出迎えてくれ。」

もつひとつもできなかつた。

溶けて、隠れて

それから、やつと街中の人々が起きだして行動を開始する頃、奴は自転車に女を乗せふらふらと出掛けていった。

「こんな朝早くから出かけても、どこも開いていないのにねえ」

残された私はミレースの顎を中指で撫でながら、一枚のガラスと向き合っていた。

そのガラスには自分の姿が映つてはいたのだが、奥に広がる風景の中に殆どが溶け込んでいた。

「気持ち悪いねえ、ミレース。お前と私、体の中に変なものが浮かんでる」

体の中には小さな庭があつた。手入れされていない草たちが無造作に私の背中をつつく。端に寄せられたいくつかの鉢には何も植えられていくなくて、栄養も何も無くなつた土が盛られているだけである。頭の方に田をやれば、そこには判透明な色氣が感じられた。

この部屋には今、人の気配がまるで感じられない。確かに私はそこにいるのだけれど、すっかり溶け込んじやつて、意識もそつちに持つていかれて、空中に浮かんでいるように不安定で、そんなことを思つていたらミレースがにゃあ、と鳴いて私の膝の上から逃げてしまった。ミレースはキャットフードが大好きだから、それが置いてある台所に行つたのだろう。少なくとも、ミレースは暇さえあればいつもそこにいる。お前は猫なんだからもう少し猫らしい行動をしないさい、とも思つてみたけれど、ミレースにはそんな気はさらさら無いようだ。

さて、私は部屋の中心に掛かつてゐる時計を見た。

今はまだ朝の時間帯である。だけど私にはもう夕方、夜のような気がしてたまらなかつた。

つこせつきの出来事が濃密すきで、まるで夢のよつで、体も心も疲れ切っていた。

疲れ切っていた?ただ単に見届けをするだけなの?。

お前はだからダメなんだ、当たり前のことにくよくよしゃがつて。あの女には来るべき時が早く来ただけなんだ。

そりやあ、文章として起こせばそんなものだけれど、表された文字がすべてつてわけじゃない。

・・・・・

なんだか私、本当におかしくなっちゃったみたい。

お昼までにはまだ時間があるもの、何かしようかな。

私が小さい頃は、もし地球が滅びるとしたら、何をやるつて質問、必ず最後に出てくるのは、「お金をたくさん使ひ」。

・・・・・

そんなわけで私は早速コンビニへと向かつた。

買ったものは100円の紙パックに入った紅茶。

大学生だもの、そんな言い訳をしながら私は別の道を歩いていった。だって大学生だもの、勉強をしなくちゃいけない。持つものは持つてきたり。

こうやってアパートへ戻らなければ、きっと普通の日常、暇な時間を使って依頼人からのノルマをやつたり、ミレットスと遊んだり、そんなことが流れるように過ぎていいくだろうと思つていた。

お昼を過ぎた辺り、男の兄貴から電話が掛かってきた。

兄貴が言つには

「なんていうか、貴方も貴方ですねえ。アパート行つたら誰もいな
い、そういうことですか」
あいつの兄貴の声はどこか人を見下してゐるよつた、そんな声であつ
た。

小説家をやつてゐるところから、やはりそれに似合つた性格なのだ
らう。私はこの人物にこれから会うことを考えるとすっかり頭が痛
くなつた。

何か無いものかと薄手のジャケットに付いているポケットを探る。
次の瞬間にはもう、私の手には一つの飴玉が張り付いていた。これ
はさつき友人から貰つたもので、暗くなる頃にでも舐めようと思つ
ていた。

私はその飴玉を口に含むと、その勢いに任せて立ち上がつた。
そうして歩きながら兄貴に一言、平謝りをした。

兄貴は言つた。

「僕は桃の味のアメが好きなんですけどね」

しまつた、と思つた。

アパートの影よりも先に、その派手な赤い車が目に付いた。その横
には黒のジャケットの中にストライプのシャツを着て、ジーパン、
赤のスニーカーという出で立ちの男がいた。

男は私の姿を確認したのか、「おお」と言いながら手を振つた。
これが兄貴なのだ。予想していたものよりも随分と若かつた。歳は
リエさんと同じくらいだろうか、女の私でさえもうらやむ様な、日
差しを充分に受けて艶やかに光る黒髪を持っていた。

「どうもこんにちは。兄貴、です」

兄貴は笑いを浮かべながら挨拶をすると、すつと手を差し出した。

私がそれを握るうとすると、「いやいや違う、アメだよ、飴」。

「ほら言つたじゃないですか。僕は桃の味の飴が好きだつて。買つてきてくれなかつたんですか？全くぼろぼろだなあ。約束破るわ飴舐めながら謝るわで、ちょっとくらい気をきかせてくれてもいいじゃないんですか」

そこまで私の思考回路は発達していないのだけれど、私はそう言い掛けのを必死で抑えた。

「ちなみに、僕の書いているコラムを読んでくれました？あれ、ペンネームで書いてるんですからね、変な誤解はやめてくださいよ。僕の名前はグリーンテドン大沢じゃない。あんな名前、馬鹿みたいだからね。本名？ああ、僕はじゅんつて言います。三つ点書いて、こうやってカタカナの九の字みたいに書いて、曰。洵。弟クンは名前を言いたがらないみたいだけれど、それも『愛嬌つてことで許してくれないかな。まあ知つたところでどうにもならないって』いうのは分かるけれど。僕のことは兄貴、兄貴さん、洵さん、なんでもよし。ただ呼びつけはダメよ。仮にも年上なんですから。」

彼はなかなかに口が達者だ。それでも今日私が会つてきて、なおかつ印象に残つた人物の中では一番話が分かる者なのかもしれない。

「それよりも、今日弟クンがやることを僕は知つていて

は？私は口をあんぐり開けて、兄貴の方を見た。奴、兄貴さんは祕密にしているつて言つたじゃないか？

「この僕を舐めちゃあいけないね。だつて僕は貴方の携帯番号だつて分かつてゐるんですから。疑問に思わなかつたんですか？僕は貴方とまるで面識がない、なのに携帯番号を知つてはいる。おかしいでしょ、でもこれ僕だからね、まあ大体のことは手に取るようになつてしまつ。一時期は日本だつて手に入れられるんじやないかって思つたけれど、それは流石に無理だつたね。せめて一都六県一道ぐらいでしょ。まあ笑い話はそこら辺にしておいて、僕もかなり貴方たちのことが心配なんです。だから僕は貴方たちについて行こうと思う。それに弟クンは免許書さえ持つていらないんだ。無免許ならま

だいいけれど、仮にあの女性に運転させて、そのまま車」と海へぼつちゃん、それじゃあ困るんですよ。貴方もぞつとするでしょ？僕だって嫌だし、それに一番おかしいのが今回の依頼内容だ。もともと弟クンのやることだからって僕は考えていたけれど、まさかそんなところにまでいってしまうのには流石にびっくりしたよ。だから僕は考えたんです。この車の為にも、僕は貴方達を守る。だってこの車、僕の少ないお給料でローン組んで買つたんですから。まだはらい終わつてもいないし、それに今のコラム連載だつて打ち切られそうなんだ。ただでさえ毎日貧しい思いをしているのに、その連載が無くなつたらそれこそ僕のほうが海に沈むよ。だから何があつても大丈夫、この僕に任せなさい。貴方は安心して車に乗つていればいい。せいぜい夜のドライブを楽しみなさい。

奴も奴で、この兄貴も兄貴だ。

私は兄貴さんの口にもうんざりしていたが、内心ほつとしていた。

大丈夫、だつて。

「とりあえず僕が今日の仕事内容知つている、というのは秘密にしておいてくださいね。僕もなかなか興味あるんです。弟クンやあの女性の行動が。それよりも弟クンは僕を乗せていつてくれるかな、無理やりに車だけでも連れて行こうとしたらそれこそ僕のお友達を呼ばなくちゃ。」

やがて、遠くからふらふらと一人乗りの自転車がやってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773a/>

挙啓、日だまりの人々

2010年12月19日01時49分発行